

アテナイのシュノイキスモスとテセウス

— 研究ノート —

新 村 祐 一 郎

—

筆者はかつてアテナイのシュノイキスモス (*συνοικισμός, Synokismos*) について、きわめて不十分ながら、その概略にふれたことがあるが^①、本稿ではシュノイキスモスと英雄テセウス (*Θησέης*) との関連を中心として、シュノイキスモスの一面を考察したい。したがって本稿はシュノイキスモスのすべてを説明するものではないことをことわっておく。

シュノイキスモスがさまざまな形で行なわれたことはいまさら述べるまでもないであろう。そのいずれの場合においても、政治上・宗教上の統一をとまなっている。つまりこれに参加した共同体の成員は共通の守護神、共通の統治機関を有するようになり、彼らは同一の国家（ポリス）の市民となるのである。シュノイキスモスは大きくわけて、その字義通り^②実際に住民が一定地域に集住せしめられる場合とそこからざる場合とがあることも周知の事実であろう^③。後者の場合は政治生活の中心の設定が眼目であるがアッティカのシュノイキスモスはこれに当ると思われる。

まずわれわれはシュノイキスモス以前のアッティカの状況を見なければならぬ。その際、いちおう参照しなければならないのはツキユディダスの記事である。彼はアテナイの人々が自身の住んでいる土地に対する愛着の強さを述べたのち「ケクロプスおよび初期の王達の時代からテセウスの治世までアッティカはそれぞれ *prytaneion* と *archon* とを有するポリスにわかれ (*εἰς ἀρχὰς πόλεως*) て住まわれており、恐るべき事態がお

こらない限りは、*basileus* の下に集まって評議することはなく、各ポリス自身が統治し、協議していた。：（中略）：しかしテセウスが王になると、智とともに力を有していたので全土に秩序を与え、すべてのポリスの *buleuterion* と諸官とを廢し、唯一の *buleuterion* と *pytaneion* を指定して現在のアテナイに統合し、住民には今まで通り自身の土地を有することを認めしたが、アテナイだけを唯一のポリスとして扱かうことを強制した。」そしてさらに、テセウスの時代このかたそれを記念すべくシュノイキアの祭が行なわれていることに言及している (Thuc. II. 15)。

以上の記事はさまざまな問題を含んでいるが、特にシュノイキスモス以前のアッティカの状況が多く、ポリスにわかれている、それらが自立性をもつものであったこと、しかし事情によってはその首長達が *basileus* の下に集まって協議する場合があったことが示されている。したがってこの *basileus* は首長達の中でも首位に立つものと考えられるが、その点に関しては、最近その国家構造についての研究が盛に行なわれている。ピュロスにおける *basileus* に対する *wanax* ⑥ に類似した存在のように見うけられる。アッティカでは人々がポリスにわかれて住んでいたというが、このポリスというのはのちのポリスよりも小規模な独立の小共同体であることはだいたい認められている。また最近の考古学上の成果として、アッティカにはいくつかの円頂墳墓があったことが知られるが、この墳墓こそ当時のポリスの首長のものであり、その近辺に首長の住居があったと推定される。アテナイもまたミュケナイ時代には王宮のあったアクロポリスは巨石の壁にまもられていたし、その時代の末期には城壁が補強され、ミュケナイ、ティリコンスと同じく水の補給への配慮も施されている。⑧

以上のように見てくると、人々はデモスともいべき小共同体④に住んでおり、共同体の首長と評議会のメンバーが支配者層であるが、首長のうちで特に有力なものが王として首長のうちの首位に立ち、諸共同体に対してある程度の支配権を有するというのがミュケナイ時代末期のアッティカのみならず、かなり一般的な状況ではなかったかと考えられるのである。

ではアテナイ(アッティカ)のシュノイキスモスがどのような方法で行なわれたであろうか。ツキュデイデスをはじめ、プルタルコス (Thes. 24)、パウサニアス (I. 23. 3) などみなそれをアテナイ王テセウスの業績に帰している。しかしこれは問題であろう。N. G. L. Hammond はテセウスが 1250 B. C. 頃の人物であると考えているようである。⑩ テセウスが実在の人物であったかどうかはにわかに決しかねるが、たとえ実在であったとしても、そこから直接に彼がシュノイキスモスを行なったということはひき出せない。

ミュケナイ時代末期にその城を焼き払い、その文明を崩壊させたのは何者であるかといえば、しばしばそれはドリス人であるとされる。いわゆ
アテナイのシュノイキスモスとテセウス

るヘラクレス (*Ἡρακλῆς*) の子孫 (*Heraclidae*) の帰還とともにギリシア北部を南下した西方言群に属するドリス人である。しかしこの時代は民族の大移動期であり、その移動は中部ヨーロッパから小アジア方面にかけて行なわれた大規模なもので、ラムセス三世 (*Ramses III*) 時代 (前一九八―一六六)^⑩ にエジプトに侵入せんとしたのも、またヒッタイトを滅亡させたのもこの民族大移動の波であり、トロイアの滅亡もこの民族移動の結果であるという推論も出ている。したがってミュケナイ文明を滅亡せしめたのもドリス人侵入以前のこの大移動の波のせいであって、ドリス人自身が文明を崩壊させたのではないという見方も不可能ではない。しかしドリス人の移動自体もこの大きな波の余波をうけたものであることは明らかである。ここではその文明の破壊者の決定はさしひかえるが、問題にしたいのはアテナイの王制に関する伝説である。

二

アテナイの王統はテセウスに至るまでにケクロプス (*Κέκροψ*) 以下九人を数える^⑪。これらの王はいうまでもなくアテナイの地方的英雄 (*ἥρωες*, *heros*) であってその実在性を論ずるには及ばない。またアテナイ王統には二王家があるとされ、第一王朝はケクロプスの次のエリクトニオス (*Ἐριχθόνιος*) からテュモイテス (*Θυμώτης*) に至る一四代、第二王朝はメラントス (*Μελάνθος*) にはじまる一九代である^⑫。もっともこれらの二王統に含まれる各王の名が確定されたのは前四世紀以後と考えられ、したがってより古い伝承がどれだけ正確に伝えられているかは定かでない。しかしこの中で注目したいのは第一王朝から第二王朝への交替とそれに関する伝承である。伝承は次のように伝えている。

すなわちテセウスの子孫でアテナイ王であったテュモイテスがボイオティア王クサントス (*Κυανθός*) と戦った際メラントスに功があったので彼がテュモイテスのあとをついで王となったというのである。このメラントスというのはかつてのピュロス王ネストル (*Νέστωρ*) の子孫で大きい (Her. V. 65)、ヘラクレイダイが侵入した時、彼はほかの子孫とともにメッセニアから追われたものの一人である。その追われたもの部分がアテナイにその避難所を求めてきたといわれている^⑬。このメラントスののち、その子コドロス (*Κόδρος*) が王位をついだが、その治世にアッティカはドリス人の侵入をうけそうになった。その時コドロスは自身の命とひきかえにアテナイを救った^⑭。彼のあとはメドン (*Μέδων*) が継いだがほかの子供達はイオニアへ植民して行った^⑮。

以上がその伝承のあらましである。この伝承はかつてはあまり重要視されていなかったが、ネストルの王宮がピュロスにあったことが明らか

にされたこんにち、きわめて注目されるようになった。伝承にあらわれる人物の名前は論外としても、ピュロスの王宮がヘラクレイダイの侵入によって破壊された時にネストルの子孫に率いられたペロポネソスの住民が大挙してアテナイに避難したこと、そのためアテナイの王権にもかなりの影響を与えられたが、そのの間もなくこの人口急増を救うためにイオニア植民が行なわれたことの伝説的表現にはかならないのである。またツキュディデスもギリシア各地から戦争・内乱などの結果アテナイに亡命した有力者は数多かったこと、そのためアテナイに繁栄もたらされたが人口増加のためにイオニア植民を行なわざるをえなかったことを示している (Thuc. I. 2)。このような混乱の時代にアテナイの王権が不安定となり、一時は避難民の有力者の手によって王権が左右されたことも考えられる。しかしその後この避難民が中心となってイオニアに植民することになる。

避難民の殺到、王家の交替、ドリス人の侵攻、イオニア植民という激動の時代を経過しつつアテナイのシュノイクスマスが行なわれたのではなからうか。コドロスおよびメドンなどが王位を継いだともアルコン (終身の) になったともいわれ (Paus. IV. 5. 10)、『メドンの次のアカストス (Akastos) の時にも同じようなことがいわれている (Arist. Ath. Pol. III. 3)』のはシュノイクスマスが行なわれ、次第次第に貴族政が確立されたことを示すものにほかならない。しかしこのシュノイクスマスもツキュディデスのいうテセウスのそれのような形で一挙になされたのではなく、ある程度の期間を要しているようである。Hignett, Bengtson, Ehrenberg 等は前八世紀の間に徐々にシュノイクスマスが行なわれ、マラトンのテトラポリスとエレウシスとの合併を最後として完成されたと述べている。そして前八乃至七世紀にアッティカ全土の政治的統一がなされたことが認められる。

ドリス人がアッティカには侵入しなかったとしても、アッティカの首長達、有力者達にとってこれはツキュディデスのいわゆる「恐るべき事態」であつたらう。イオニア植民が一段落をつげた頃、以後他民族の侵入によって混乱をきたさぬようアッティカを強化せんがため有力者が漸次アテナイに集中しはじめ、おそらくテトラポリスの合体を最後に、エレウシスを除く全土が統一されて、これまでの諸ポリスを法的には無効とし、ここにシュノイクスマスはいちおう完成される。アッティカの各地に散在していた有力者が自身の共同体を去って中心市アテナイにおいて王の諮問機関としての会議を構成して国政に参画し、次第に王を無力化して貴族政が成立するのである。そして地方の首長の住地であったポリスがデモスに格下げされ、全領域を一個のポリスとしたのである。要するに、シュノイクスマス以後各地のデモスは国家組織からは遊離した

アテナイのシュノイクスマスとテセウス

存在となり、その状態はクレイステネスの改革まで続いたものと思われる^②。しかし一般の人々がデモスにわかれたまま住んでいたことはツキユ
 デイデスが何度もくり返し語っている通りである (Thuc. II. 14-16)。

三

ではテセウスとは何者であろうか。テセウスがアテナイで盛に崇拜されるようになったのは前五世紀以後であり、それは明らかにペルシア戦
 争と関連がある^③。マラトンの戦においてテセウスが出現しペルシア軍に攻撃をかけた (Plut. Theb. 35; Paus. I. 15.3) と信じられて以来、
 特にその崇拜が高まり、スキュロス島から彼の遺骨と称するものを持ち帰りアテナイに葬ったといわれる (Plut. Theb. 36; Arist. Ath. Pol.
 Epit. Herakleid. I) が、戦時に愛国心が高まるにつれ、各地の英雄の出現が盛となるから、これはあり得ないことではない。テセウス伝説で
 は彼とマラトンの結びつきは強いから彼がマラトンの戦の時に出現するのは当然である。テセウスの名はアッティカのシュノイクスマスの過程
 においてアテナイに知られたかもしれないが、それはいまだマラトンの地方的英雄にすぎず重要な存在ではなかったはずである。それがマラト
 ンの戦を機に急にその名声が高まるとアテナイにおいても盛に崇拜され、ついには伝説的な王統の中に名を連ね、その名声は確定的となる。
 しかし、ここで注目しなければならないことはマラトンを中心とするテトラポリスが (エレウシスを除いて) もっともおおそくアテナイと合一し
 たということである。テトラポリスはマラトン平野にある四個の集落が合して成立したポリスであるが、テセウスはこの地およびその周辺と
 因縁深い英雄である。しかも四ポリスが合して一個のより大きい集落を形成したものであることはその名称からも明らかである。したがって
 テセウスはあるいはこのテトラポリスという四個のポリスの複合体を形成する際に、何らかのかかわりを持ったと信じられる英雄で、該地方に
 おいて尊崇されていたのではないかと推察される^④。またツキユデイデスによるとアテナイのシュノイクシアなる祭をテセウスが創始して今に及ん
 でいるというが、たしかにこの祭がシュノイクスマスに関連しているのは間違いないであろう。しかしながらこの祭も直接テセウスに結びつく
 とは考えられない面がある。シュノイクスマスとはさきに述べた通り宗教の上での統一を伴うものでなければならぬ。アッティカの場合
 はアテナイの守護神であるアテナを共通の守護神として認めたはずである。したがってシュノイクスマスがいついかなる形でなされたにしても、
 シュノイクシアの祭は当然アテナ神のためのものでなければならぬが、その創始者としては必ずしもテセウスでなければならぬものではない。

Bengtson^⑧によるとアッティカの統一はアテナイのアクロポリスに住んでいる支配者層がメソゲイア、テトラポリス、アクテナなどを結合したもので長期間を要しているが前八世紀には完成されていた、しかしエレウシスが加わったのは前七世紀になってからであろうとしている^⑨。これらの地方はおそらくエレウシスを除いて前八世紀後半までにアテナイに合一されたものであるが、それが一挙になされたものであるとは考えられない。しかしこれらの土地の統一がいちおう完成された時こそシュノイキアの祭が創始された時期として自然ではないかと思う。アテナイのシュノイキスモスにしてもシュノイキアの祭にしてもいづれもテセウスがマラトンの戦によって名声を高からしめ、アテナイの王の一人として認められるようになってから、彼に帰されたものと考えるべきである。

ヘロドトスの時代にはいまだアテナイの王統(第一王朝)は確定されておらず、ヘロドトスもテセウスのほかケクロプス、クラナオス(Koroneus)^⑩、エレクテウス(Epegeteus)^⑪、アイゲウス(Ageus)の名を伝えるのみであり、^⑫のちの Marmor Parium^⑬ などは異なる点がある。このうちエレクテウスについては、^⑭のちの伝承によるとエリクトニオスの孫でパンディオンの子とされている(Paus. I. 5.4)が、ヘロドトスにはいまだエリクトニオスの名は伝えられていないのである^⑮。したがってエレクテウスの方がより古くから伝えられている名であって、のちにエリクトニオスの名があらわれたと見るべきである。エレクテウスは大地から生まれアテナ神に育てられてアテナイの王となつたといわれ、さらにアテナイ人はエレクテウスが王位を継いだ時にアテナイ人(Athenaioi)と名をかえたといわれる(Her. VIII. 44)が、本来はアテナ神と関係浅からぬアテナイの英雄であると推定される。しかるにエレクテウスはポセイドン神との関係もある。Nilsson^⑯はアテナイのエレクテウスの社(エレクテイオン)ではポセイドン神とエレクテウスに共通の祭壇があり、両者の結びつきはかような崇拜の場所の上でじ場の併存に基礎づけられているという。Nilsson はさらにミュケナイ時代からアテナイ王家ではポセイドン神崇拜がなされていたと推定し、同所で崇拜されている英雄エレクテウスとしては、その神(ポセイドン神)の下位に立たされる可能性が強いと述べている。このようなエレクテウスのポセイドン神との密接な関係がテセウスを王統へ結びつける一の有力な手がかりになったのではあるまいか^⑰。テセウスはアイゲウスの子とされているが、^⑱真実はポセイドン神の子であるという伝えが有力であり(Plut. Thes. 6; Apollod. III. 15.7)^⑲。しかもアイゲウス自身がポセイドン神の分身とさえ考えられるべき根拠がある^⑳。

またケクロプス、クラナオス、エレクテウスはいずれも大地(ガイア)から生まれたとされ、アテナイの土地生え抜きの英雄であることを思

アテナイのシュノイキスモスとテセウス

アテナイのシュノイクスマスとテセウス

わしめるが、アイゲウスとテセウスはむしろ逆にアテナイ生まれではないところに特色がある。^④ このことはテセウスが元来はアテナイと強く結びつく英雄ではないことを暗に示している。それがマラトンの戦をきっかけに全アッテイカの英雄としてクローズアップされるとともに、かつてケクロプス、エレクテウスなどに帰されていた古くから続けられている諸祭式などが次第にテセウスの事跡として彼個人に集中されて伝えられるようになる。^⑤

四

アテナイのシュノイクスマスはさきに見た如くだいたいにおいて前八世紀であったが、ほかの多くのポリスの成立もほぼ同じ頃と考えられる。しかしギリシア全体として見るとシュノイクスマスはこの時代だけに限られているわけではなく、ほかの時代にもあり得る。たとえばアルカディア南部のテゲア (Tegea) においては前七世紀に九個の村落が一個の中心市をつくり、住民の大部分をそこに移住させている (Strab. VIII. 3.2; Paus. VIII. 45.1)。これは明らかにスパルタの攻勢に備えるための手段である。スパルタは前六世紀にはいつてからその矛先をテゲアに向け、同世紀の中頃これを征服している。^⑥ また前六乃至五世紀にかけてはアカイア地方においてシュノイクスマスが行なわれている。アイギオン (Aigion)・パトライ (Patrai)・デュメ (Dyme) などがいずれも七乃至八個の村落のシュノイクスマスによってポリスになった (Strab. VIII. 3.2)。ペルシア戦争の頃のものとしてはエリス (Elis) がある (前四七一年)。中心市エリスは数多くの小さいポリスのかわりに作られたと云う (Diodor. XI. 54.1; Strab. VIII. 3.2)。エリスへのシュノイクスマスが行なわれた時、市民の間の政治的関心がうすかったので、事実上中心市へ移り住むものは少なかったといわれている。エリスではおそらくアテナイなどの影響で一〇部族の設立と五百人の評議会が創設され民主政が採用された。^⑦ とするとこのシュノイクスマスは民主政体へ変えるために行なわれたことになる。アルカディアのマンティネイア (Mantinea) の場合は五個のデモスのシュノイクスマスによってなっており、成立 (前五〇〇年頃か) 後間もなく民主政をとっている (Strab. VIII. 3.2)。^⑧

ペロポネソス戦争当時には三例が知られている。第一はオリュントス (Olynthus) の場合でマケドニア王ペルディカス (Perdikas) のすすめでデロス同盟から離反し、海岸地方のポリスを捨て内陸のオリュントスに移住している。これは勢力を増強するためのシュノイクスマスである

ことが明らかであり、住民の移住をとまなう文字通りのシュノイクスマスであった(Thuc. I. 58)。第二はレスボス(Lesbos)でペロポネソス戦争開始の直後に行なわれたもので、五個のポリスのうちミュティレネ(Mytilene)を残して、ほかの四個はポリスたるの資格を放棄するという形でなされた(Thuc. III. 2ff.)。これはツキユディデスのテセウスによるシュノイクスマスに関する叙述(「アテナイだけを唯一のポリスとして扱うことを強制した」)を思い出させる。第三はロドス(Rhodos)である(Diodor. XIII. 75.1)。ロドス島にはすでにイアリュソス、カミロス、リンドスの三個のポリスがあったが前四一二年にデロス同盟から離れ、前四〇八年にあらたに建設された都市ロドスへ集住し、それまでの三個のポリスは行政区として残されたという。

そのほかポイオティア各地に散在する住民がテバイ(Thebai)に移住した場合がある。ポイオティアはアテナイと対立したので、エリュトライなど城壁を持たない多くの町の人々がテバイに集住させられたというが、これは武装している首都へ地方の住民が集められたことを示している。^④

以上例示したペロポネソス戦時のものはいずれもデロス同盟から離脱するか、あるいは在来アテナイに対立していた地方で行なわれたもので、アテナイの攻撃をおそれてそれに備えるための措置と考えられる。しかしテバイの例は戦時中の非常手段として行なわれたもののようにであり、厳密な意味でのシュノイクスマスといえるかどうか問題であろう。

いずれにせよこれら前七世紀以後のシュノイクスマスは軍事的関心の高いものであるということができる。

五

では前八世紀頃のシュノイクスマスはどうであろうか。スパルタやメッセニアのようにドリス人が侵入し支配した地域では、多くの先住被征服民族の反抗に備えるための意味が多分にあり、やはり軍事的関心の高いシュノイクスマスといふべきものである。アテナイそのほかのポリスでもミュケナイ時代の王国の支配下にあった小共同体(デモス)がポリス形成の要素となっているところから考えて、シュノイクスマスはこれら小共同体のいくつかを合体せしめて自衛するという意味をたしかに持っている。

したがってシュノイクスマスのなかで前五乃至四世紀のものだけを特に軍事的関心の高いものとして、それ以前の殊に前八世紀頃のシュノ

イクスマスと区別するのは不当ではないかと思われる。ただ古い時代のシュノイクスマスの場合はドリス人のポリスは別として、ドリス人の侵入と破壊のおそれるべき気憶から発した防備であったのに対して、より新しい時代のシュノイクスマスは現実に強力なポリスとして眼前にあらわれたアテナイ、スパルタなどに対する対抗手段として形成されたという違いだけである。

むしろ前八世紀頃のシュノイクスマスと以後のそれとの相違は前者が政治と軍事に専心し得る階級の成立とその階級による支配（貴族支配）の成立をもたらすことが多いのに対して、前六世紀以後のそれは大部分が民主政を前提としているという点に存するのではあるまいか。もちろん後者の場合、特にエリス、マンティネイアなどはアテナイなどの民主政の影響をも考慮すべきであろう。

ところで以上に述べた比較的新しい時代のシュノイクスマスこそテセウスがアッティカのシュノイクスマスを行なったとする伝承を生み出すひとつの基盤となったと考えられる。長期間を要せず一挙にシュノイクスマスが行なわれるのは前六世紀以来一般的であり、政治的中心の設定が主で他のポリスがすべて法的に無効となるというのも同様である。したがって前五世紀の人々にとってシュノイクスマスとはこのように短期間になされるもので、長期間かかって次第に完成されるものとは思われなかったのである。そこでアッティカの過去におけるシュノイクスマスも、それを指導した人物があったと当時（前五世紀）の人々が考えるのは当然であり、その場合アテナイの人々の心に強い影響を及ぼしたばかりのテセウスこそもっとも適当な人物であった。^④テセウスのシュノイクスマス伝説は特にツキュディデスによって創造されたのではなく、当時の人々のシュノイクスマスに関する常識からの当然の帰結である。エリスのシュノイクスマスなどはアッティカのテセウスによるそれを彷彿させる面もある。テセウス崇拜はテトラポリスにおいてはそれがアテナイに統合されたのちにも、持続された。それ故にこそマラトンの戦の際、出現したといわれるのである。^⑤しかるにこの戦は実際上マラトンのみでなく、アッティカ全土（ひいてはギリシア全土）の運命を決するものであったためにマラトンの地方的英雄がアッティカ全土を救った英雄となる。その場合キモンによってスキュロス島から持ち帰られたテセウスの遺骨と称されるものがマラトンにはなくアテナイに祭られたことがきわめて重要な意味を持つ。その結果テセウスがケクロプス、エレクテウスなど土着の英雄と同等の地位を得て、アテナイの王の一人に列せられることになったのである。のちのプルタルコスなどはテセウスが民主政を予告したといふ（*Plut. Thes. 24 & 25*）のうちにパンアテナイア祭の創始者といふ（*Plut. Thes. 24*）がツキュディデスはそのことには言及していない。これらは次第にアテナイの最も輝かしい時代の基礎をも彼の事跡の中に求めるようになったために付加されたものと思われる。

アテナイに限らずシュノイキスモスを論ずる場合にはまだ多くの問題が残っていることはいうまでもない。たとえば市民権の基礎となったクレロスの起源などもシュノイキスモスとの関連においてとらえるべきであろう。すべて本稿で触れ得なかった点は今後の問題として考えて行きたい。

〔註〕

- ① 拙稿「シュノイキスモスについて—スパルタとアテナイの場合—」（『古代史講座』第六巻、一九六二年、三四—五八頁）。
- ② 動詞 *συνωικήειν*, は to make to live with と訳される。
- ③ V. Ehrenberg, *Der Staat der Griechen*, 2. Aufl., 1965, SS. 27—31. にはおもな場合が例示されている。
- ④ くカンニクニオン¹の第一六日に行なわれたアテナの祭 (cf. L. Deubner, *Attische Feste*, 1932, S. 36)。
- ⑤ N. G. L. Hammond, *A History of Greece to 322 B. C.*, 1959, p. 66.
- ⑥ J. Chadwick, *The Decipherment of Linear B*, 1958 (paper back edition = 1961, p. 115); J. H. Oliver, *Demokratia, The Gods, and the Free World*, 1960, p. 1; 大田秀通『シケーネ社会崩解期の研究』、一九六八年、一五九—一六二頁など参照。
- ⑦ *Der Kleine Pauly* Band I, 1964, 722—3 参照。
- ⑧ F. H. Stubbings, *The Recession of Mycenaean Civilization* (Cambridge Ancient History, Revised Edition of Volume II Chapter 27), 1965, pp. 13—14.
- ⑨ テキスが数個集まってポリスが成立する場合が多い。
- ⑩ Hammond, *op. cit.*, p. 68.
- ⑪ H. Bengtson, *Griechische Geschichte von den Anfängen bis in die römische Kaiserzeit*, 2. Aufl., 1960, SS. 49—50.
- ⑫ この年代は Stubbings, *op. cit.*, p. 4 にある。
- ⑬ Bengtson, *op. cit.*, S. 53.
- ⑭ この点は多くの伝承の一致するところである。
- ⑮ この点伝承は一致せず、エリクトニオスはケクロプスのあとを継いだともアンフィテュオンを追放して王位についたともいわれる (高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』、一九六〇年、七一頁参照)。なお *Marmor Parium* では Kekrops, Akraios, Kanaos, Amphiktyon, Erichthonios, …… となっているが別伝もある。
- ⑯ C. Hignett, *A History of Athenian Constitution to the End of the fifth Century B. C.*, 1952, p. 38.
- ⑰ Hammond, *op. cit.*, pp. 83—84 参照。

アテナイのシュノイキスモスとテセウス

アテナイのシュノイキスモスとテセウス

- ⑱ アッティカに敵（ヘラクレイダイ）が侵入しようとした時、彼らがアテナイ王を殺さなければ勝利を得るとのデルフォイ神託を受けていることを知り、自身敵の陣へ行って喧嘩をしてわざと殺されヘラクレイダイはそれを知って軍を引いたという伝承がある（Paus. I. 19. 5; V II. 25. 2 など参照）。
- ⑲ Herodot. IX. 97 参照。
- ⑳ メラントスの王位継承の伝説などはこれの反映ではなからうか。
- ㉑ イオニア植民は伝承から推定されるような短い時間に行なわれたのではなく、かなり長年月を費して行なわれたようであるが、移住者の出発の中心地になったのはアテナイである。移住は考古学上の証拠によると前一〇世紀頃からはじまっていた（cf. J. M. Cook, Greek Settlement in the eastern Aegean and Asia Minor (Cambridge Ancient History, Revised Edition of Volume II Chapter 38), 1964, pp. 10—14.）。
- ㉒ いずれにしても伝承は「コドロス」・「メドン」・「アカストスのあたりで王政が終ることを暗示している」。なお Hignett, op. cit., pp. 38—39 は Melanthos と Kodros は legendary, Medon は mythical, Akastos は historical な存在だとする。
- ㉓ Hignett, op. cit., p. 37.
- ㉔ Bengtson, op. cit., S. 82.
- ㉕ Ehrenberg, op. cit., S. 33.
- ㉖ Ehrenberg, op. cit., S. 33.
- ㉗ 改革までデモスは地方自治機関的存在であったと考えられる（前掲拙稿五三—五五頁参照）。
- ㉘ 原随園「テセウス伝説考」（『西洋史研究』一・二・三号、一九三二—三三年）『ギリシア史研究第三』所収、一一—一〇頁、『ギリシア史研究第三』六九—七〇頁参照。
- ㉙ プルタルコスはファイドンがアルコンの時（前四七六—五五年）に持ち帰られたという。
- ㉚ 祖国が危急の場合その地と結びついている英雄が出現して国を守ると信じられていた。拙稿「スパルタの制度とリュクルゴス伝説」（『史林』四四卷四号、一九六一年、四九—七四頁）七〇—七一頁に若干の例を示した。
- ㉛ すなわちシュノイキスモスである。
- ㉜ もしそうであれば彼のアテナイのシュノイキスモス完成者への転化はより容易であろう。しかし確証はない。
- ㉝ Bengtson, op. cit., S. 82.
- ㉞ この点についてはかいつ K. J. Beloch, Griechische Geschichte, 2. Aufl., 1912, Bd. I, Abt. i, S. 207 も同様の見解を表明している。
- ㉟ ただし彼らの事跡についての記載はほとんどなく。
- ㊱ エリクトニオスの名があらわれるのはピュンダロスの Puth. VII. 10 が最初である（原前掲書六四頁参照）。
- ㊲ すべてにホメロス（Il. II. 546—551; Od. VII. 80—81）にアテナとエレクトテウスとの関係が見出だせる。
- ㊳ M. P. Nilsson, Geschichte der Griechischen Religion, 2. Aufl., 1955, Bd. I, S. 449.

- ③⑨ プルタルコス (*Thes.* 3) はテセウスの血筋がエレクトテウス及び土地生え抜きの最初の人々にまでさかのぼるといふがプルタルコスの時代にはアテナイの王統の伝承は確定されていたからケクロプスまでさかのぼれるのは当然である。しかし時にエレクトテウスの名をあげているのは注目されてよい。またアテナ、ポセイドン両神がともにアテナイと密接な関係にあることは両神のアテナイの土地所有争いの伝承からも推察される。
- ④⑩ アイゲウスはポセイドンの側称アイガイオスと関係があり(原前掲書一八一―二二頁)、アイゲウスは英雄の形をとったポセイドンと考えられる。なお高津前掲辞典五頁参照。
- ④① テセウスの生地としては普通トロイゼンがあげられる。またアイゲウスはパンディオンの養子ともいわれる (*Plut. Thes.* 3: 13)。
- ④② ヘラニコスによるとパンアテナイア祭の創始はエリクトニオスに帰されている (*cf. Deubner, op. cit., S. 23*) がプルタルコスによるとテセウスに帰されてゐる (*Thes.* 24)。
- ④③ この点については拙稿「スパルタのテゲア征服について」(『大手前女子大学論集』第一号、一九六七年、八八―九九頁) 参照。
- ④④ A. H. M. Jones, *Sparta*, 1967, p. 70 参照。
- ④⑤ *Thuc.* V. 29 に「メンティネイアがアルコスと同じく民主政の国であることに触れている」。
- ④⑥ *Hellenica Oxyrhinchia, Fragmenta Londinensia* XV II (X II). 3 参照。
- ④⑦ 前五世紀の初頭の馬拉トンの戦以後急速にその尊崇が高められ、遺骨の移葬によってそれは頂点に達した。アテナイ移葬の年代はプルタルコス (*Thes.* 36) によれば前四七六―五年である。註 ②⑨ 参照。
- ④⑧ 土地を守ると考えられる英雄は敵がその土地に侵入した場合に限って出現するものである。